実用禅語

- 禅語類語辞典 -

010 暦日

【010 季節】

【四季】（しき） 四季。春夏秋冬のこと。

【四序】（しじょ） 四季のこと。「四序惨舒（しゃ）も止まらず、人生各（おのおの）為す有り」（良寛詩集）

【甲子】（かっし） 甲子は干支（えと）の始まりであることから、干支、季節、時候の意味で用いられる。「きのえね」と読む時は最初の干支をいう。

【四節】（しせつ） 四季のこと。または禅林では四季を区切る四つの儀礼、結夏（けつげ）・解夏（げげ）・冬至・年朝の日をいう。

【四大節】（しだいせつ） 四節に同じ。▽010四節

【011 春】

【青陽】（せいよう） 春のこと。「青陽二月の初、色裕（やや）新鮮」（良寛詩集）

【春山青春水碧】（しゅんざんせいしゅんすいへき） 春の山は青く、春の水は青い。当たり前の姿、それがそのままで美しいこと、価値あること。

【一花開天下春】（いっかかいてんかしゅん） 「一花開きて天下の春」とも読む。一つの花が咲いたことによって天下が春がだということが知られること。▽021業落ちて天下の秋を知る

【春色高下無く、花枝は自ずから短長あり】（しゅんしょくこうげなく、かしはおのずからたんちょうあり） 春色無高下、花枝自短長。春景色に上下はないけれども、咲く花にはいろいろあることをいう。

【012 夏】

【夏時】（かじ） 夏の時節。

【朱明】（しゅめい） 朱夏に同じ。「四月朱明の節」（良寛詩集）▽021朱夏

【夏中】（げちゅう） 真夏。陰暦の六月。または夏安居（げあんご）を行なっている三カ月のこと。▽052夏中楞厳会・242安居

【夏節】（かせつ） 夏の時節。あるいは端午の節句。

【氷節】（ひょうせつ） 陰暦六月一日のこと。衆僧に氷を施すことからいう。▼059

【087 醍醐】

【醍醐】（だいご） 乳製品の一種。牛乳を煮詰めて作るもので、最も純粋で最上等のもの。▽156醍醐味

【酪】（らく） 乳製品の一種。牛乳を精製して作る食物のこと初期の段階のもの。

【酥】（そ） 乳製品の一種。牛乳を煮詰めて作るもので、酪から醍醐へと精製されてゆく過程でできるもの。

【088 肉】

【精底の肉】（せいていのにく） よい肉、精肉。

【弁道】（べんどう） 仏道に精進すること

【功夫】（くふう） 工夫とも書く。修行に専念すること。▼620 ▽052功夫坐禅

【弁道功夫】（べんどうくふう） 修行に専心すること、弁道を強調した言い方。▽665弁道

【功夫弁道】（くふうべんどう） 弁道功夫に同じ。▼620

【龍象蹴踏】（りゅうぞうしゅうとう） 勝れた象同士の競い合いという意で、ずば抜けた禅僧たちが集まって修行している様子の喩えに用いられる。▽306蹴踏・671龍象

【667 教外別伝】

【教外別伝】（きょうげべつでん） 祖庭奉旨（そていじえん）」に出る達磨の言葉とされるもの。拈華微笑（ねんげみしょう）の嗣法の後で釈尊が言われた言葉ともいう。「不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏」の第二句で、禅宗の宗義を表わしたものとされる。すなわち、禅の教えは経典ではなく、その文字に書かれたものにあるのではなく、

【示衆】（じしゅ） 師僧が弟子たちに教えを説くこと。▼657「師、示衆して云（いわ）く、道流（とう）て、仏法は用功（ゆうこう）の処無し」（臨済録）

【説似】（せつじ） 説き示すこと。

【説取】（せっしゅ） 漏れなく説き示すこと。▽650

【説取行取（せっしゅぎょうしゅ）】 説くことと行ずること。禅門ではこの二つは一つのことであると観る。▽650説取

【説法利生（せっぽうりしょう）】 仏法を説くことを通して衆生を利益（りやく）すること。▽650法益

【法鼓（ほっく）】 仏の説法のこと。古代中国で戦争の合図に太鼓を用いたことから、衆生の煩悩を

【086 薬】

【湯薬】（とうやく） 食事・湯・茶・薬などをいう。▼089

【137 中途半端】

【半前落後】（はんぜんらくご） 中途半端なこと。

【半上落下】（はんじょうらくげ） 半前落後に同じ。▽132半前落後

【半合し半開く】（なかばがっしなかばひらく） 半合半開。中途半端なこと。境地。「いはゆる、もし言語道断、心行処滅を論ぜば、一切の治生産業（ちしょうさんぎょう）みな言語道断し、心行処滅なり」（正法眼蔵）▽321言語道断・321心行処滅

【半路に身を抽きんでる】（はんろにみをぬきんでる） 途中で手を引くこと。

【閑管】（かんかん） 無駄なこと、無価値な関わり。

【閑技俩】（かんぎりょう） 無駄な小細工、無意味な功夫。

【閑功夫】（かんくふう） 無意味な修行、無駄な努力。「この『禅定』『深入』等の道理、さきより閑功夫ありて造作（ぞうさ）しおきて、いまの漢に伝受すにはあらず」（正法眼蔵）

【閑功夫漢】（かんくふうかん） 無駄な修行をする者。

【閑無相】（かんむそう） 無相への執着を断った境地。または形相の変化などの影響を受けない本質的存在、真如のこと。▽088有相・088形相・120真如

【閑無相生】（かんむそうむしょう） 形がなく、生じることもないこと。すべての存在・事象は本来空であることをいう。

【無相法門】（むそうほうもん） 空の教えをいう。

【無相真如】（むそうしんにょ） 有相の影響を受けない真の真理。

【無相道場】（むそうどうじょう） 現実世界を断絶した自己の内奥にある道場、個々の仏性をいう。

【138 要機】

【要機】（ようき） 最も肝要なところ、要諦。▽252玄旨

【機宜】（きぎ） 要機に同じ。▽136要機

【要訣】（ようけつ） 極意、秘訣。

【要眼】（ようげん） 仏法の眼目、要諦。

【底事】（ていじ） 極意、究極、本来底。何事、どんなことであるかといった疑問を表わすこともある。▼101

【139 父母未生以前】

【父母未生以前】（ふぼみしょういぜん） 「ふぼみしょういぜん」とも読む。両親が生まれる前のこと。差別（しゃべつ）が生まれる前の本来の面目

【玄奥】（げんのう） 奥玄（おうげん）に同じ。▽252奥玄

【玄猷】（げんゆう） 奥深い教え、奥深い道理。

【玄若（げんにゃく）を談ずるに口を開かず】（げんをだくちをひらかず） 談玄互不開。玄奥の真どの文字に書かれたものにあるのではなく、文字

【875 その他の梵音具】

【白槌】（びゃくつい） 諸事を衆僧に告知するために槌く。▽670

【槌】（つい） 槌く。▽670

【槌打】（ついだ） 槌くこと。▽670

【槌砧】（ついちん） 槌くこと。▽670

【槌版】（ついばん） 槌くこと。▽670

【槌鐘】（ついしょう） 槌くこと。▽670

【槌鼓】（ついこ） 槌くこと。▽670

【槌木】（ついぼく） 槌くこと。▽670

【槌木鼓】（ついもっく） 槌くこと。▽670

【槌木魚】（ついもくぎょ） 槌くこと。▽670

【槌木版】（ついもくばん） 槌くこと。▽670

【槌鳴】（ついめい） 槌くこと。▽670

【槌鳴版】（ついめいばん） 槌くこと。▽670

【槌鳴鼓】（ついめいこ） 槌くこと。▽670

【槌鳴鐘】（ついめいしょう） 槌くこと。▽670

【槌鳴木魚】（ついめいもくぎょ） 槌くこと。▽670

【槌鳴木版】（ついめいもくばん） 槌くこと。▽670

【槌鳴版】（ついめいばん） 槌くこと。▽670

【槌鳴鼓】（ついめいこ） 槌くこと。▽670

【槌鳴鐘】（ついめいしょう） 槌くこと。▽670

【槌木】（ついぼく） 槌くこと。▽670

【槌木鼓】（ついもっく） 槌くこと。▽670

【槌木魚】（ついもくぎょ） 槌くこと。▽670

【槌木版】（ついもくばん） 槌くこと。▽670

【槌版】（ついばん） 槌くこと。▽670

【槌砧】（ついちん） 槌くこと。▽670

【槌打】（ついだ） 槌くこと。▽670

【槌】（つい） 槌くこと。▽670

【展鉢】（てんぱつ） 粥飯（しゅくはん）の時の打槌。一番最初の槌で、これを合図に開槌（もんつい）の偈・展鉢の偈を唱える。▽822展鉢・873打槌・898開槌の偈・898展鉢の偈

【歎偈】（たんげ） 粥飯（しゅくはん）の時の打槌。歎偈を唱える時に打つ。▽898歎偈

【呪願】（じゅがん） 粥飯（しゅくはん）の時の打槌。十仏名の後の打槌で、これを合図に施食（せじき）の偈を唱える。▽898施食の偈

【遍食】（へんじきい） 粥飯（しゅくはん）の時の打槌。粥飯を衆僧に配り終わったことを知らせる打槌。これを合図に五観の偈を唱える。▽898五観の偈

【下堂】（あとどうい） 粥飯（しゅくはん）の時の打槌。下堂を知らせる打槌。収鉢後に行ない、これを合図に処世界梵を唱える。

【施財】（せざい） 粥飯（しゅくはん）の時の打槌。施主から施財がある場合に行なうもので、これを合図に施財の偈を唱える。▽898施財の偈

【火鈴（かれい）】 開枕（かいちん）の後に火の用心を知らせるために振る鈴。

【袈裟】（けさ） 梵語kāṣāya（カーシャーヤ）の音写。原意は赤褐色。▽721袈裟・721福衣

【僧祇支】（そうぎし） 僧脚衣（そうぎゃくえ）・覆肩衣（ふくけんえ）・覆胸衣（ふきょうえ）・掩腋衣（えんえきえ）ともいう。五衣（ごえ）の一つ。比丘尼にないように肌に

【覆肩】（ふくけん） 中国で考案された法衣（ほうえ）。

【偏衫】（へんさん） 偏衫とも書き、「へんざん」とも読む。中国で考案された法衣（ほうえ）。袈裟の下に着用する上衣で、左半身を覆う祇支（きし）と右半身を覆う覆肩（ふくけん）を縫い合わせたもの。南宋の頃にこの形式が普及したという。これに下衣である裙子を着ける。この祇支と覆肩と裙子を一体化させたものが現在の直裰（じきとつ）である。▽721直裰・721覆肩・721裙子

【杉袖】（さんしゅう） 直裰（じきとつ）または偏衫（へんさん）の袖のこと。▽721直裰・721偏衫

【祇支】（きし） 中国で考案された法衣（ほうえ）。偏衫（へんさん）の左半身に当たる。本来は僧祇支の略で尼僧の衣のことを意味した。▽721偏衫・721覆肩・721裙子

【裙子】（くんし） 腰から下の下衣で、腰と上衣の襟衫が直裰（じきとつ）（くんず）に当たる。▽721裙子

【腰衣（こしごろも）】 裙子（くんず）に同じ。▽721裙子

【衣杉】（えさん） 袈裟（けさ）と襟衫（へんざん）のこと。▽721 ▽721袈裟・721福衣

【僧祇支】（そうぎし） 僧脚衣（そうぎゃくえ）・覆肩衣（ふきょうえ）・掩腋衣（えんえきえ）ともいう。五衣（ごえ）の一つ。比丘尼には肌に

【偏衫】（へんさん） 偏衫とも書き、「へんざん」とも読む。中国で考案された法衣（ほうえ）。袈裟の下に着用する上衣で、左半身を覆う祇支（きし）と右半身を覆う覆肩（ふくけん）を縫い合わせたもの。南宋の頃にこの形式が普及したという。これに下衣である裙子を着ける。この祇支と覆肩と裙子を一体化させたものが現在の直裰（じきとつ）である。▽721直裰・721覆肩・721裙子

【杉袖】（さんしゅう） 直裰（じきとつ）または偏衫（へんざん）の袖のこと。▽721直裰・721偏衫

【祇支】（きし） 中国で考案された法衣（ほうえ）。偏衫（へんざん）の左半身に当たる。本来は僧祇支の略で尼僧の衣のことを意味した。▽721偏衫・721覆肩・721裙子

【覆肩】（ふくけん） 中国で考案された法衣（ほうえ）。

【裙子】（くんず） 腰から下の下衣で、腰と上衣の襟衫が直裰（じきとつ）（くんず）に当たる。▽721裙子

【腰衣（こしごろも）】 裙子（くんず）に同じ。▽721裙子

【衣杉】（えさん） 袈裟（けさ）と襟衫（へんざん）のこと。▽721 ▽721袈裟・721福衣

【僧祇支】（そうぎし） 僧脚衣（そうぎゃくえ）・覆肩衣（ふきょうえ）・掩腋衣（えんえきえ）ともいう。五衣（ごえ）の一つ。比丘尼には肌に

【293 智慧】

【智】（ち） 知識、知恵。主に仏法に関する智慧をいい、世俗の知恵と区別する。また、智と慧を別種の智慧とみる場合は、慧よりも高い悟りの智慧をいう。▽252慧

【慧】（え） 知恵、知識、悟りの智慧をいう智に対して、知恵全般をいう。

【智慧】（ちえ） 智と慧、または般若の意訳語。あるいは智のこと。▽252智・▽252般若

【般若】（はんにゃ） 悟りの智慧、または「般若経」に説かれる教え。▽252般若波羅蜜

【智火】（ちか） 智慧の炎。智慧が煩悩を断じ尽くすことを炎に喩えたもの。

【不惜眉毛】（ふしゃくびもう） 眉毛を惜しまずに同じ。▽650眉毛を惜しまず

【眉毛を惜しむ】（びもうをおしむ） 仏法が誤って広まるのを恐れてあえて説法を控えること。⇔650眉毛を惜しまず ▽398醍醐堕落（ごじょくだらく）・450眉毛

【惜取眉毛】（しゃくしゅびもう） 眉毛を惜しむこと。▽650眉毛を惜しまず

【眉毛を惜しまず】（びもうをおしまず） 不惜眉毛（ふしゃくびもう）ともいう。仏祖が法門が落ちることになってもかまわないという覚悟で説法をすること。自身を犠牲にしてでも法を広めようとする姿勢をいう。「眉毛兄弟の為に惜まず。満地の葛藤満面の慚」（良寛詩集）⇔650眉毛を惜しむ ▽398醍醐堕落（ごじょくだらく）・450眉毛

【不惜眉毛】（ふしゃくびもう） 眉毛を惜しまずに同じ。▽650眉毛を惜しまず

【眉毛を惜しむ】（びもうをおしむ） 仏法が誤って広まるのを恐れてあえて説法を控えること。⇔650眉毛を惜しまず ▽398醍醐堕落（ごじょくだらく）・450眉毛

【惜取眉毛】（しゃくしゅびもう） 眉毛を惜しむこと。▽650眉毛を惜しまず

かじきとう　加持祈祷　757
かしゃ　火舎　713
かしゃ　家舎　678
かしゃく　掛錫　841
かしゃっこ　可惜許　427
かじゅ　課誦　887
かじゅ　雅趣　464
かじゅい　課誦位　982
かじゅう　火頭　866
かじゅうあんじゃ　客頭行者　865
かじょう　可笑　笑う可しを見よ
かじょう　家常　193
かじょうさはん　家常茶飯　193
かしょく　火燭　532
かしょく　華燭　747
かしん　佳辰　151
かしん　掛真　794
かしんし　掛真師　976
かしんぶつじ　掛真仏事　986
かすいぐもん　画水求文　389
かせつ　夏節　012
かせん　家先　524
がそう　画僧　799
がぞう　臥像　782
かだ　伽陀　898
かたく　火宅　030
がたん　雅談　464
がち　雅致　464
かちゅう　夏虫　476
かちゅうのれん　火中の蓮　291
かつ　活　075
かつ　喝　687、830
かつあい　渇愛　441
かつがん　活眼　644
かつがんぜい　活眼睛　644
かつく　活句　298

682
びゃくじょうやこ　百丈野狐　682
びゃくだん　白檀　051
びゃくつい　白槌　870、875
びゃくついご　白槌語　974
びゃくついし　白槌師　974
びゃくはっちょう　百八鐘　120
びゃくぶつ　白仏　933
びゃくれんげ　白蓮華　056
びゃっぱい　百拝　806
びゅう　謬唸　271
びょう　瓶　318
びょう　瓶　531
びょう　渺　116
びょうか　病仮　968
びょうしょう　氷牀　097
びょうしょう　評唱　683
びょうじょう　平常　184
びょうじょうしん　平常心　420
びょうじょうしんこれどう　平常心是れ道　855
びょうじょうぶじ　平常無事　184
びょうせき　評席　861
びょうせつ　氷雪　097
びょうせつ　氷節　012
びょうそうくし　病僧口詞　968
びょうそうねんじゅ　病僧念誦　968
びょうどう　平等　294
びょうどういちにょ　平等一如　294
びょうどういっし　平等一子　294
びょうどういっしのひがん　平等一子の悲願　294
びょうどういっしん　平等一心　294
びょうどうしん　平等心　474
びょうどうそくしゃべつ　平等即差別

294、295
びょうはく　表白　895
びょうはくもん　表白文　895
びょうはみずよりいでてみずとりさむし　氷は本より生じて水より寒し　097
ひょうびゃく　表白　895
ひょうびゃくもん　表白文　895
ひょうよう　飄颺　207
ひらい　比来　154
びる　毘盧　572
びるしゃなによらい　毘盧遮那如来　572
びるちょうをこうほし、しゃかもんをうけず　毘盧頂を高歩し、釈迦文を棄けず　856
びるばくしゃてん　毘楞博叉天　576
びるろしゃてん　毘楞勒叉天　576
ひろう　披露　990
ひろもつ　披露物　990
びん　嶺　052
びんかつ　敏黠　188
びんこし　乗矩師　976
びんこぶつじ　乗矩仏事　986
びんじゅ　賓主　525
びんじゅこうさん　賓主交参　525
びんじゅごかん　賓主互換　525
びんじゅそうこう　賓主相交　525
びんしゅつ　擯出　498
びんじゅれきねん　賓主歴然　525
びんちゃ　瓶茶　089
びんでい　兄弟　549
びんどう　貧道　500
びんばつ　擯罰　498
びんぷう　嶺風　028
びんぼう　乗払　659
びんぼうく　乗払歳　872

かきょう　家教　656
かく　覚　570、610、616
かぐ　家具　530
かくおう　覚皇　570
かくおうはうでん　覚皇宝殿　701
かくがい　格外　125
かくげ　格下　125
かくげ　格外　125
かくご　覚悟　610、612
かくこん　攪渾　252
かくさつ　嚇殺　336
かくしゃ　覚者　570
かくじょう　客情　446
かくす　客司　547
かくそう　客僧　845
かくでん　客殿　706
かくちゅう　客中　446
かくどう　客堂　706
かくどう　覚道　610、620
かくとうば　角塔婆　778
かくねんむしょう　廓然無聖　856
かくり　客裡　446
かくりん　鶴林　556
かくん　家訓　656
かけん　家眷　520
かこ　化古　241
かこう　過荒　104
かさ　笠　725
かさごこう　牟後光　780
かし　過師　125
かじ　花字　339
かじ　加持　757
かじ　夏時　012
かじ　橋事　099
かじ　遐爾　103、104、105
かじかじ　橋事橋事　436